希学園　小4　第4回　習熟度確認テスト　国語　2024年11月23日実施　【模範解答】　制限時間40分

【配点】 1・2・3 各2点×20　4・5・6 各6点×2　その他 各4点×12

1

1. 綿
2. 水害
3. 季節
4. 告白
5. 夕焼（け）
6. 右側
7. 労働
8. 別（れる）
9. 衣服
10. 観光地

2

1. エ
2. オ
3. イ
4. ウ
5. ア

3

1. ウ
2. カ
3. エ
4. イ
5. オ

4

1. アタリマエ

5

2 I. けである。
II. 「収める」

3 I. 上の句 宿～て　下の句 今～り（3 I 完答）
II. エ

4. 論理的な説明がなされていない（4 同意可）

5 I. 中ぶらりん
II. 落ちつくところ（5 完答）

1. ヤマモト
2. 十

3 A. ウ　B. イ　C. ア　D. エ（3 完答）

4 I. 全員リレー
II. タケダ君のせいでビリ

5. イ

6. 抜かれないように走らなければならないという大きな責任を感じて（6 同意可）

希学園　小４　第４回　習熟度確認テスト　国語　２０２４年11月23日実施　【解説】

1

（漢字の書き取り）

1から10まですべて、ベーシックのトレーニングテキストにて出題されているものである。漢字は、正しい字形を覚えるためにふだんから一画一画ていねいに書くことを心がけよう。反復練習をするのはもちろんのこと、意味調べもして、漢字と意味とをセットで覚えていくことが大切である。語句全体の意味と漢字一つ一つの意味との対応も理解していくこと。

2

（同類語）

同類語を覚えていくことで、文章中にある同意表現に気がつくようになるなど、読解力の向上にも役立つ。基本的なものはしっかりと覚えよう。同類語にはさまざまな組み合わせがあるが、今回出題したのは共通する字を持たない二字熟語同士の組み合わせである。3はつなげて「完全無欠」という、よく知られている四字熟語にもなる。

3

（呼応の副詞）

ベーシックのトレーニングテキストNo.35にて出題されているものである。それぞれのことばを使って簡単な文を作ってみるとよいだろう。

4

1　ニュートンは同段落一行目の「天才と言われている人」の一例である。彼らは普通の人間が「アタリマエ」と思っていることにも疑問を覚え、その疑問を「追究」するのだと書いてあった。

2　随筆文の読解の基本として、筆者自身の具体的な経験を語る部分と、意見や主張を語る部分とを意識的に読み分けたい。Ⅰ「子ども心にもこの話は私の心に残ったのか」とあるので、その直前までが話の内容であるはず。Ⅱこの話をもとに、「論理」によらず「美的判断」によって心を「収める」道を見いだすことへの提案が、最終段落にて述べられる。

3　Ⅰ短歌の前半五七五部分を「上の句」、後半七七部分を「下の句」というが、このことを知らずとも、本文中の記述を注意深く読めば「上の句」と「下の句」の指すものの見当はつけられるはず。傍線部をふくむ一文にある「黄門の言葉」とは「宿るべき水も氷に閉ざされて」のことであり、「幽霊の言葉」とは「今宵の月は中天にあり」のことである。Ⅱできあがった短歌は「本来ならば水面に宿るはずのものだが、水面が氷に閉ざされているので、今夜の月は空に浮いているのだ」といった意味になる。論理的、科学的に正しい説明でないことは確かだが、水面に映る月を本来の月の姿とみなす新鮮な発想を、短歌の音数の規則を守りつつ提示している点を「収まっている」ものと述べている。

4　傍線部は講談中の短歌について述べた部分である。「どういうこと」かと問われたら表現の言い換えを問われているものと考えたい。ポイントは「西洋流に考える」ということの意味だが、前段落で「論理によらない解決法」を「日本的解決法」と言い直していることから、筆者の発想の根底に「論理」＝「西洋」、「非論理」＝「日本」という対立軸が潜んでいることを見抜きたい。すると、西洋的発想の一例としてニュートンによる万有引力の法則の例が引かれていたことにも気づかされる。

5　「本文中にいくつか見られ」るという設問の文言もヒントになっている。黄門の短歌について述べた段落に「幽霊も心が収まって消えていった」とあるのが、この種の表現の初出である。幽霊は「ハテナハテナ」と疑問を口にしていたわけだが、「はてな」という気持ちとどう向き合うかという点は本文の最初に示されたテーマであり、そこからニュートンや講談の話へと広がっていったのだ。

5

1　自分自身の視点では「私」だが、人からどのように呼ばれるかは周囲の人との立場の違いや人間関係によって変わってくる。全員リレーで「私」が走っているとき、仲良しのマサコちゃんは「私」のことを下の名前で呼んでいるが、マツモト君は名字で呼んでいる。

2　「運動会になるとみんなを仕切りたがる」というマツモト君は運動が得意なのだろう。タケダ君とマツモト君は正反対の性質を持っていることになるが、この二人に限らず、人間はそれぞれに違いがある。それを四字熟語で言い表したのが「十人十色」である。よく似た意味の四字熟語に「千差万別」がある。

3　適切な擬態語を選ぶ問題である。「じんじん」は、血のめぐりが悪くなってしびれる様子や、寒さ・痛み・感動などが心身にしみこむ様子。ここでは強い緊張からそう感じている。「ぶつぶつ」は、ここでは小声で不平不満をもらす様子。「ちらちら」は、くり返しすばやく視線を走らせる様子。「へなへな」は、力なく座りこむ様子。それぞれの様子が正しくイメージできるようにしておこう。

4　運動会の「何が」「どうなるのか」を考える。「今年も」ということは去年起こったことがまた起こるということであるから、——線①の一行前の「去年はタケダ君のせいでビリ」というところからⅡの答えをぬき出す。ここからさらに「何が」ビリだったのかを考えるとⅠも見つかる。

5　テキストからそのまま出題した。みんながタケダ君のことをどう思っているのか、「みんなの冷たい視線を一身に浴びて」タケダ君自身も感じ取っているのだろう。「足元の砂を小さく蹴って」いる様子から、いじけた気持ちになっているのがわかる。

6　復習テストNo.33で出題したものと同じ問題である。ふだんから復習テストの直しをしっかりやっていってほしい。「私」が感じている責任がバトンの重さとなって表れている。「責任は重い」「荷が重い」「肩の荷がおりた」など、責任を「重いもの」としてとらえた表現は多い。ここで「私」が感じている責任とはどのようなものか、「クラスのみんなのために」につながる形でまとめる。本文中の「足の速さがふつうの私」や「全員リレーでは、人に抜かれなければ許される」という表現、——線③の直後の表現などから、「私」が「せめて人から抜かれないようにしたい」と思っていることがわかる。

以上